

白虎隊一島津天嶺、戦艦大和一東京葉原雨竹、時は今也一平井春嶺、本能寺一鹿兒島小畑鶴峰、小栗栖一三美会矢吹旭美津、湖水渡一浜松小野鶴彦、加茂の春雨一京絃社植村真水、秋風故郷の山一京都琵琶協会梅原旭濤、小敦盛(前)一長谷川博章、同(後)一杉本治作、舟弁慶一横須賀齊藤殊水、寂光院一粟本天芳。以上演奏六時終了後乾盃の宴が開かれ前記大金盃に清酒を満たし約五十人の列席者に廻し呑みをして七時半目出度散会した。

た。故郷の道一横堀、月下の陣一山下、青葉の笛一高久、重衡一阿伊、合奏五条橋一穂嶺、穂仙、白虎隊一穂美、茨木一穂芳、竜の口一藤川晴水、井伊大老一太場穂苑、城山一宮田糸水、静一石井桑水、羽衣一藤原一穂芳、穂苑、琴国重、伯電錦穂、天女新部桜水、大高源吾一会主都錦穂、(以下来賓)乃木静子夫人の歌一仲川秀邦、常盤の前一桑名洲聖、霧の川中島一谷暉水、桶狭間一山本鶴声、外に詩吟二題。

錦賜会主催の 五月六日昼藤沢カトリック各流大演奏会 ク教会講堂。本能寺一大坪錦賜、恩讐の彼方へ一下村錦賜、敦盛一山本珠水、井伊大老一細田宵水、伊豆の御難一酒井綜水、竜の口一今井城水、赤穂の落日一丸山錦楓、安宅一太井錦淀、衣川一成田双水、采巡礼の歌一西村錦風、新撰組一小西香水、崎流島一中村錦道、(以下来賓)吉野落一清水綾水、西郷隆盛一平野鉦水、雪晴れ一鈴木謙水、茨木一榎本山水、坂崎出羽守一梅沢响水、実盛一山田幻水、元寇一伊集院牙城、吹雪の敵一中谷襄水、屋島の誉一新部桜水、道成寺一鉛谷六水、安達ヶ原一会主秋山錦賜。

一水会名古屋支部 五月十二日昼名古屋香の演奏会 市中小企業会館ホール。桜狩一浩風、城山一浩山、河内の宿一坂井田孝水、木村重成一中西穂水、常陸丸一伊藤皇水、白虎隊一前田絹水、伊豆の御難一安江弘水、石童丸一小林残水、小袖曾我一神藤敷水、野田の笛一加藤澗水、井伊大老一丹野鮎水、武蔵野一太西弘水、菊水の旗一谷津壮水、常盤御前一土川吟水、西郷隆盛一三輪靴水、新撰組一阿部勝水、小栗栖一水谷浩水、山岡鉄舟一奥村慧水、(以下来賓)羅生門一東京田中光水、実盛一松本金井暁水、父乃木將軍一大阪小川吟水、竜の口一東京小山田賞水。

錦。都錦穂 五月九日夕五時東京上家元披露演奏会 野本牧亭、錦穂後援会主催。琵琶歴四十年、この度都派を創設し家元披露のため四氏を来賓に迎え盛大に開催され

○京都琵琶協会六月定期茶話会 六月二日(日)午後一時向日市西向日かえて町山端二梅原旭濤女史宅(電話九二二一四五二番)

欠席者は当日午前中に必ず御連絡下さい。○筑前琵琶紅会演奏会 六月十三日(木) 屋東京日本橋三越劇場。○日本琵琶振興会六月懇親研究会 六月二十三日(日)一時一八時東京新宿洲楓会館。○琵琶を楽しむ会 六月二十三日(日)午後一時京都東山仁王門電停前本妙寺(一般参加歓迎) ○筑前琵琶青葉会演奏会 六月三十日(日) 昼大阪難波高島屋七階ホール。

あ 馥郁たる梅花の香にひたり爛漫の桜花に浮かれ、青葉若葉の新緑を染がしんだのも東の間、世は早くも清楚なあやめ、かきつばた、濃艶な煙たん、ばらの花咲く季節となった。光陰矢の如し、月日に閑守なし、と昔の人は良いことを云った。本紙も夢の内に二百四十号を数え二十周年をお祝い下される御寄稿を沢山頂いて本号に全部掲載し切れず申し訳ないがあと次号に廻させて頂くの已むなきに至った。何れも身に余る結構なご祝詞をひたすら感激している。●齢八十に程近く今後何年続ければいいのかからぬが幸いに未だ極めて頑健で「百里を行く者は九十九里を以て半ばとす」の古諺を信条にして駄馬に鞭打ち琵琶奏発展の一翼を荷うつもりで努力したいと思ふ。●倍旧の御支援御垂教をお願い申し上げます。

昭和四十九年六月一日発行 (非売品) 編集者 植村真水 発行所 京絃社 高槻市津之江北町一ノ二二三 電話 〇七二六八五六〇五一番

琵琶 機関紙

京

絃

第二四〇号 京絃社

回顧二十年

主幹 植村真水



琵琶機関紙「京絃」は、このたび創刊二十周年を迎えました。之は偏に愛読者皆さまの厚き御支援御鞭撻によるものと衷心感謝感激いたしております。

顧みれば「京絃」は、終戦の混乱期からようやく落付きを取戻しかけた昭和二十九年、京都在住各流派琵琶人の琵琶文化向上と琵琶楽の振興発展に資する事を主眼に、家業の隙を盗んで謄写版刷り二頁の極めて貧弱な第一号を発刊したのが抑もの始まりで、爾来四頁、八頁と紙数を漸増し、一年を経た第十三号からプリント印刷にして体裁を整えたと共に、単に京都地区のみに限定せず広く全国の琵琶人並に同好の士に愛読して頂いて今日に至りました。

然しながら、定期刊行物の発行ということに経験も智識もない、云わば全くの素人の仕事としては、号を重ねるに従い重荷となつて責任を痛感し、如何にすれば初期の目的を貫徹し読者諸彦に満足して頂くことが出来るか、

という点で人知れず苦勞を致しました。丁度その時分、今は亡き友人で琵琶の好きな木村清三郎氏が積極的に協力して呉れて、「びわ狂生」の仮名で「それ達人は大観サウ」の一文から始まって、以来毎月欠かさず仮名、匿名で名文を綴つて琵琶人を激励啓発し、或は琵琶に關連の記事を執筆されて面目を保ちましたが、それでも時には原稿が足りなくて困り果て、知人の大学教授や有識の先生方に無理をお願いして寄稿して貰った事も再三で、一方琵琶人の雅号や文章の中に使われている当用漢字外のむづかしい活字が多いため、数軒のプリント屋から次ぎ次ぎと敬遠されて印刷屋探しに狂奔したり、特に最近止どまる所を知らぬ諸物価高騰で印刷代も御多聞に洩れず暴騰し、その他の有形無形の苦節二十年を克服して、幸い一回の遅刊欠刊も出さずに漸く今日を迎えたのですが、幸いに只今では「琵琶界に京絃あり」の認識を深くして頂き、特別に好意をお寄せ下さる琵琶人諸彦や同好

諸士により、毎号興味深い有益な御寄稿や各地行事の情報、或は読後感などの投稿が山積して、所謂「原稿の種切れ」という心配も全く無く、磐石の基礎を固めさせて頂くに至りました。

此間創刊五周年には「現代琵琶人大鑑」の発行、十周年には京絃社主催の記念演奏会開催、十五周年には琵琶楽器を表現した意匠の京染浴衣の実費頒布などの記念事業を行い、或は毎年の新年号や銷夏特別号の発行など、想起すれば文字通り感無量で、愛読者皆様の御支援に因るのは勿論の事ながら、筆者としても琵琶が何よりも好きならばこそ、損得を全く無視して今日まで続けることが出来たに外なりません。



なお、「京絃」が二十年の歳月を費し琵琶界に貢献した功績を讃えて、日本芸能顕彰会(理事長鈴木鉦次郎氏)から巖に金盃や功勞楯を頂きましたが、今回重ねて最高榮譽の立派な大型トロフィーとリボン付大金メダルを贈られたのは身に余る光栄で、今後益々精進して「京絃」の内容充実に一層力を注ぎ、発行

当初の目的たる琵琶文化向上、琵琶楽振興発展のために邁進して読者諸氏の御期待に副いたく決意を新たにしております。終りに臨み、定期的に本紙に御執筆下さって

景を詠じたものである。浅草眺望 神崎則休 隅田河口待船休 農舎繁榮春稻秋 梅若墳楊似帝土 業平詠草唱皇州 龍山日没梵鐘響 牛社月登華表幽

狂酔亭漫録 (第百)

歌人神崎与五郎

古谷 寛水

本稿も今月で第百回を算する。京絃誌も創刊二十周年を迎えたが、私の執筆開始当時、植村氏から何回位の予定かと問われ、手許の資料のみでも無尽蔵に近く、唯書く事の気力がいつ迄続くかが問題だ、と答えたが、それ以来十年経過し私も八十歳に達した。書き度

彼が青年の頃より一家の卓見を有し、其の著書に「神書覚書」「絶縁自解」の二書があり歌道は葛岡修理大夫の門に学んだのである。橋の雪 旅人も道は迷はじ水の上に 雪一筋の勢田の長橋 夜の雪 伏見の里の夜の雪折

先年本稿にて俗説神崎与五郎と題し、彼の伝記の概略を紹介したが、昔から講談浪曲演劇小説等では相当大身の赤穂藩士として取扱

之は討入の年江戸に在って浅草や隅田川風景を詠じたものである。元禄十五年春に至り大石は、先に江戸へ差遣した同志吉田忠左衛門、近松勘六の他に更に敵状を探らせべく増員を思い立つ。即ち神崎の人柄に目を付け、彼と前原伊助の両名を下らせる事に決する。従って神崎は此年の三月特別任務を以て東下するのであるが、胸中閑日月の境地にて歌を詠み続ける。



神崎の此の二首は嘗て本誌で紹介したが重ねて記載する。後者は常盤御前の三児を連れて雪夜都落の有様を詠じたものである。元禄十四年三月松の廊下の事変により主君切腹家断絶となり赤穂藩は解体した。神崎は仕官後未だ五年に満たぬに拘らず、奮然と意を決し「人に事へその粟を食む者はその人の為死せんのみ」と名分を明かにし、最初から同盟に加わり、籠城の議から殉死の論まで常に大石と一致して働き、其後開城退散となり、快拳を期して播州那波に隠棲した。

神崎の此の二首は嘗て本誌で紹介したが重ねて記載する。後者は常盤御前の三児を連れて雪夜都落の有様を詠じたものである。元禄十四年三月松の廊下の事変により主君切腹家断絶となり赤穂藩は解体した。神崎は仕官後未だ五年に満たぬに拘らず、奮然と意を決し「人に事へその粟を食む者はその人の為死せんのみ」と名分を明かにし、最初から同盟に加わり、籠城の議から殉死の論まで常に大石と一致して働き、其後開城退散となり、快拳を期して播州那波に隠棲した。

神崎の此の二首は嘗て本誌で紹介したが重ねて記載する。後者は常盤御前の三児を連れて雪夜都落の有様を詠じたものである。元禄十四年三月松の廊下の事変により主君切腹家断絶となり赤穂藩は解体した。神崎は仕官後未だ五年に満たぬに拘らず、奮然と意を決し「人に事へその粟を食む者はその人の為死せんのみ」と名分を明かにし、最初から同盟に加わり、籠城の議から殉死の論まで常に大石と一致して働き、其後開城退散となり、快拳を期して播州那波に隠棲した。

元禄十五年春に至り大石は、先に江戸へ差遣した同志吉田忠左衛門、近松勘六の他に更に敵状を探らせべく増員を思い立つ。即ち神崎の人柄に目を付け、彼と前原伊助の両名を下らせる事に決する。従って神崎は此年の三月特別任務を以て東下するのであるが、胸中閑日月の境地にて歌を詠み続ける。

神崎の此の二首は嘗て本誌で紹介したが重ねて記載する。後者は常盤御前の三児を連れて雪夜都落の有様を詠じたものである。元禄十四年三月松の廊下の事変により主君切腹家断絶となり赤穂藩は解体した。神崎は仕官後未だ五年に満たぬに拘らず、奮然と意を決し「人に事へその粟を食む者はその人の為死せんのみ」と名分を明かにし、最初から同盟に加わり、籠城の議から殉死の論まで常に大石と一致して働き、其後開城退散となり、快拳を期して播州那波に隠棲した。

事の方が正伝で、其証拠に大高の託状は明治の代まで三島の旧本陣世古六大夫の方に保存されていたとは、福本日南の調査による。神崎は麻布谷町に一戸を借り美作屋善兵衛と仮称して扇子や團扇の行商人として上杉家や関係先を密偵し、又或時は本庄二ツ目相生町三丁目の前原伊助の開く酒屋に到り吉良邸の動静を覗うのであるが、風雅の道は忘れな

又吉田忠左衛門を中心に在江戸の同志集って観月の宴と称し舟を泛べて会議を催した。同じ心なる人々誘ひ八月十二日 隅田川の逍遙にまかりて 鳥の名の都の空も忘れけり 隅田川原に澄む月を見て 月前友

ふるさとの空に傾く月影を 見よとや夜半の初雁の声 九月十三夜 露の身の浮世の風に漏れてまた 長月の名の月も見る哉 九月十八日は我ら必ずな美作徳守の宮の祭日にて昔は必らず玉垣に月など待ちつるに遠き東に待れども心に

景を詠じたものである。浅草眺望 神崎則休 隅田河口待船休 農舎繁榮春稻秋 梅若墳楊似帝土 業平詠草唱皇州 龍山日没梵鐘響 牛社月登華表幽

籠めて祈る事のありければ 海山は中にありとも神垣の へだてぬ影や秋の夜の月 又先般岡野絵図面取の項で紹介した 時雨に寄せて 同志の者の初恋をよめる 神無月しぐるゝ風はこゆるとも 同じ色なる末の松山 一首は同志岡野金右衛門の謀略的恋愛の破局の哀れさを詠んだものと思われる。

昔の人達が自分の声だけで歌っている間は何も気付かなかつたのですが、楽器を作つて之でそのふしを楽器で模倣し乍ら伴奏することになって、はじめてどれだけの音が必要であり、そしてどのような間隔と順序で音が並んでいるのかに気づいたのであります。之が音階を認識した最初の経験でありました。

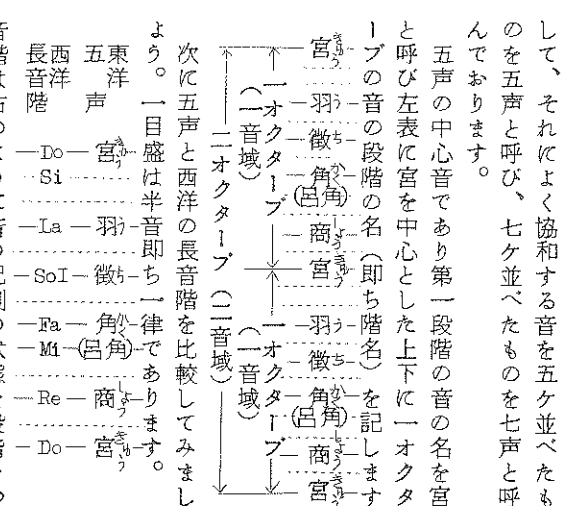
楽理を学びながら合理的に 技を磨きましよう (五)

普門 義則



音階とは字の通り「音の階段」の意味であつて、旋律を作るのに必要な協和音を、高さの順序にハンゴのように並べた、オクターブ(一音域)の音列を云うのであります。東洋では、一音域に於て一つの基音(宮)に対

して、それによく協和する音を五ケ並べたものを五声と呼び、七ケ並べたものを七声と呼んでおります。五声の中心音であり第一段階の音の名を宮と呼び左表に宮を中心とした上下に一オクターブの音の段階の名(即ち階名)を記します。



次に五声と西洋の長音階を比較してみよう。一目盛は半音即ち一律であります。五声 東洋 宮、商、角、徵、羽、宮。西洋長音階 Do, Si, La, SoI, Fa, Mi, Re, Do。音階は右のように音の配列の状態を段階をつけて表わしたもので、いわゆる音列の形のものさしであり、西洋では之を音楽的尺度「ミュージカルスケール」と言っており、順を追って薩摩琵琶の音階について説明いたしますが、只今は音階についての定義を申述へ御理解を得たいと存じます。

ました十二律より選出した一ツ高さか与へられて、その律の名の調が生れるのであります。例へば一越調、平調、黄法調、盤法調、等々と。調とは一つの組成された音階に高さか与へられて成立した調子を指称したものであります。尚この他に調、調子を楽器の調法に用い、三味線の本調子、二上り、三下り等、又箏の桜、平、古今、雲井、曙、中空、秋風、岩戸調子等。又十二律の一ツを指して黄法の調子を吹いて下さい等にも混用されております。鹿児島の方言では調子と云うと、拍子、動律のことを指し、調子のおたぬと云っているのではありません。

◎旋法
基準音を中心に調和した律が時々刻々に変化し乍らある律から他の律へ旋り進んで行く状態を旋法と云い、その旋法が一体、どのような高さの音の配置の関係即ち音階を如何なる経路で動き旋るか、その特種の形と方法を旋法と云うのであります。それは音楽の種類に依って異つてあります。東洋音楽、(中国及日本)では呂旋と律旋とに大別され、律旋に属する日本の民俗音楽には更に陰旋法と陽旋法と陰陽混合旋法があります。西洋音楽は現在長旋法と短旋法に大別されてあります。音楽上、音階と調と旋法が同じような内容ながら、この三ツに使われられているのではありません。(禁転載)
(次稿に薩摩琵琶の音階、旋法について解説いたします。)

我が道を行く
六十五年(一六)
西郷 天風



その頃、つまり明治から大正時代には、就職に際しても旧幕時代の士族と平民と云う族称の格差が重視されており、公式の書類や履歴書等にも、姓名の肩書に士族又は平民の族称を明記せねばならなかった、それだけ職種に對する意識が若人の気持を左右するものも止むを得ぬ次第で、「職業に貴賤なし」などの言葉をよく聞かされたものだった、昭和の今日からみれば洵に噴飯ものと云えよう。
兎に角、その日の朝帳場に座ると程なく、一番々頭吉田がいかにも我が意を得たり顔でほゞえみながら「早速お帳場の仕事にかゝりましよう」と私の右手に座を占めた。そこへ三番番頭の荒船が、次いで二番番頭の口井も反物類数十種を帳場の前に取揃えて、その品目と価格を一々読み上げる、それを各番頭受持の大福帳に記入するのが帳場の朝の仕事である。番頭はそれを小形の箱に積み、小僧に曳かせて得意先を廻る。それがこの店の商法で新橋界隈の芸妓家、料亭、旅館などが得意先のことだった。その為であろう、店の方へは殆ど客の来ることはない、あとは夕刻持帰った品目を差引き、残りの分を売上げとして点検する、それが帳場係の事務であった。

ところで、初めての私が商人の間で使用する符牒に似た数字を知っておることに番頭達は驚きの眼を見張っていたが、私は夕食後下宿屋の方の整理を口裏に早稲田の雲井館へ戻った。小原は表面就職を喜ぶ風にみせていたものの内心はいかにも淋しげな風情で迎えるのである、私も亦先祖代々経験のない商人への仲間入が成し遂げられるであろうか我ながら不安で、確信が持てぬまゝ翌日も其翌日もいやそれ以上四週間もの間決心がつかずに病氣上りの小原を相手に過ごしていた。

それは大正三年秋のこと、其前八月には彼の第一次世界戦争の火蓋が切られ、我軍部では東洋への波及を最少限に抑える為、既に青島攻略の兵を進めていたが一般には戦争気分などなかった。処が十月八日の昼頃、突然小高い丘の上にある雲井館の周辺が騒がしくなり、低い巷の方からケタタマシイベルの音と共に何やら叫ぶ声が聞こえ、耳をすませば青島陥落を伝える新聞号外売りの叫び声である、此時、頃日の迷夢から醒めた私は、一目散に銀座の松屋へと急いだ。
この日を記念に生活の立直しもよからうと決心の足取り軽く、松屋の店先に飛込めば、番頭達初め若旦那迄が恵比寿顔を綻ばせての大歓迎である、一番々頭の如きは抱きつかんばかりの表情で出迎え、直ちに二階へ案内されて、そこに寂しく事務を執っておる一人の老人に向い、「やっ」と代りのお帳場さんが見付かりました」と紹介された。これが、老齡

のため一旦辞職した元のお帳場さんで、対応の挨拶にも心からの喜びが溢れてみえた。それより三階に昇れば、其処は呉服物類が雑然と散在し、左右の棚には夥しい反物類が一杯である。吉田は其中から縞の着尺を取り出し、「併では店に座っても似合いません、之がよいでせう」と、私の肩にかけて眺めつつかしつ、寸法を取りながらこんな話をするのだった。

此の店はこの新橋でも中々評判のよい店で使用人も十四名、そのうち番頭が四人おるが今度あなたがお帳場さんに就職したからにはさしづめ五番々頭となる筈です。私は一躍番頭とはと驚いて問返せば、お帳場が店全体を監視する権限を有たないと取締がつかない、それには番頭の資格が必要です、大旦那の關係で店員となつたあなたは当然五番番頭ですよ、実は先程の老人はこの店で一番古い番頭だった、老衰の為昨年一杯で退職したものの、代りがない為可愛想に御手伝をしているのです、あなたの前に六人程就職希望者が見えたが、一人として自信の持てる人はなかった、只一人一晩泊つた某大学出身者があつただけ、あとは五人共朝来て夕刻には匆々と帰つてしまふ始末だった、其理由は、あなたが現に体験してお判りの様に、若旦那の書くあの文字とそれにあの数字、あれを読み取る人は今迄一人もなかった、あなたはどうしてあの数字を御存じですか、と。
お家流に似た若旦那の字は兎も角、数字の

方は元来支那式のもの聞くが、先づ123は1111、456は×××、789はニニニであり、それも1111は横に書いてもよいとして、×××や×××などは早書きして字が崩れるため、今時の人達はこの数字を知る者は甚だ稀であろう、私がこの数字を知つたのは、かつて上州館林で正田荒物店兼業の煙草元売捌所に手伝いを頼まれていた折、種々雑多の荒物類に、一々符牒がしるされてあり、それが符牒ではなくて数字であることを知り、面白半分覚えたのが後日になって大いに役にたつた訳であつた。
斯くて就職忽々五番々頭として計理部長格に収まった私ではあつたが、元來琵琶演奏の時以外に、しかつめらしい顔で端座するようなことはなかった。

京都琵琶協会の
各流派合同春季演奏会



春雨けむる四月十四日(日)十一時から京都東山の安井金比羅宮會館で恒例の首記が開催された。前夜から降り出した雨で聴衆の集りがひそかに案じられたが、定刻前から詰めかけた琵琶愛好者は二時頃には満員の盛況を呈し、嬉しい期待外れであつた。これは桜花満開の好季節という花見には打つてつけの日曜日、雨にたゞられてこちらに足を向けた人も多いらしく何が幸いになるか、兎に角終

演迄席を立つ人も殆どなく盛會裡に終始したのは、事前の宣伝が多分に利いた事を物語っている。只残念なのは鉄道のストでゲストの前田秋声氏が来演不能となつたのと、昨今流行を極めてる感音のため、プログラム中二三の会員が欠演の已むなきに至つた事で、予定よりも約一時間早く四時過ぎに終演したが、雨を侵しての来聴者は極めて熱心に静聴して薩筑各流派の特長を玩味していた。閉會後乾盃の宴に移り和やかな雰意の裡に六時散會した。
(出演者と曲目) 吉野落上ー山本嶺舟、鴨川の露ー一坊寺旭晴、桜ー錦嶺・幸生・紅嶺、粟津の露ー清水旭翠・山崎旭栄、西郷隆盛ー牧南水、曲垣平九郎ー安住旭康、道成寺ー植村寛水、桜井の駅ー田中鵬水、広瀬中佐ー坂本一峰、六号潜水艇ー平井春嶺、小栗栖ー梅原旭濤、合奏掛合河中島ー神戸竹内優水、反町紫水、舟弁慶ー矢吹旭美津、壇の浦ー東京鈴木流泉、青の洞門ー戸田旭公、鉢の木ー古谷寛水。

言
寸 (25)

石田三成 豊臣から徳川への中で、三成くらい不運なクジを引いた人物は少なからう。結局は関ヶ原で家康に敗れて京六条河原の露と消えたが、大徳寺三玄院にその墓があるのは春屋和尚が三の親密だったからで、墓の文字は既に磨滅しているが、明治四十年土中から発掘のものである。

祝 京絃創刊二十周年

小川 吟水

早いもので、二十年の永い間奉仕的なお仕事を続けなさいました御努力の程敬服致します。どうか此上とも健康に御留意の上「京絃」の歴史をのばして下さいませ。

榎本 旭風
高千穂 旭楓

此の度創刊二十周年をお迎えなさいました御日出度うございます。心より御祝い申し上げます。私達は一つ手紙をと思いましたが大変でございますのに、二十年の永い間続けられました事は仲々の御事と存じます。今後共京絃の益々御繁栄をお祈りいたします。

平井 春嶺

これからは、各演奏会の、出演者の批評を掲載してほしい。(せめて関西だけでも) これからは、京絃社主催の、有料演奏会を開いてほしい。(せめて年一回でも) これからは、京絃社主催の、コンクールを開いてほしい。(関西だけのもの)

これからは、京絃社は、琵琶人の指導的立場に立ってほしい。(特に若い琵琶人に)

これからは、琵琶に関する、質疑応答欄、をもうけてほしい。

以上の実現は仲々困難であることはよくわかっておりますが、せめて一つだけでもやってほしいと思います。敢えて希望して創刊二十周年の祝辞といたします。

押田 旭 窃

この度は貴紙創刊二十周年を迎えられ誠に御目出度御喜び申し上げます。他の邦楽とちがい二十年の長い年月機関紙を続けてお出しなされた事は、どんなにか御苦労のあった事と存じます。今後も琵琶界の報道紙として御飛躍をお願い申し上げますと共に、京絃の益々御発展を心からお祈り申し上げます。

浅野 晴風

貴社二十周年を迎えられお目出とう存じ上げます。難かしく近頃の斯会にあって二十年間一回も休まず続けられた御努力に對し心から敬意を表する次第であります。今後益々御発展をお祈りいたします。

竹下 翠風

編集という表面に現れない苦労の多い仕事を、よくぞ二十年間続けられたものと先づ敬意を捧げます。同じ編集の道を四十年続けて来た私として、誰よりも理解できる積りで出来上がった紙上の華やかさの陰の努力——これは芝居に於ける舞台と裏方、あるいは奈

古谷 寛水

二十周年に憶う

今回京絃紙が創刊二十周年を迎えた。各方面の諸氏からの祝詞讀辭は多分本誌を埋める事であろう。本誌編集者側近の一人と目される私が、今更で管々しく祝辭を述べた事は何だか空々しくさえ思われるので、植村氏よりぞ今更で頑張った、と言だけ察めて、他は側面から既往を觀察したいと思う。

本誌の美点は何と云っても、文化的記事がその大半を占めている事である。無論琵琶界のニュース記事は必要であるが、之を短縮或は取捨して巻尾の一、二頁に止め、余の全頁を琵琶道史、関係ある歴史の研究、芸術上の理論、斯界昔話、等々の教養的記事に充たしているのは実に立派である。之等の記事により啓発される読者も多い事と思われる。

併し反面、之等の記事に關心を示さず、否理解し得ない読者も在る事は事実である。現に甚だしきに至っては、古参者であり乍ら、京絃は金儲け目的のブンヤ仕事だ、自分は一頁も読まずに層籠に棄てている、と人前でも外する者もいる。その小人的態度は実に歎かむらしい次第である。私は齒に衣を着せる事が嫌いなので有りの

祝 京絃創刊二十周年

小川 吟水

早いもので、二十年の永い間奉仕的なお仕事を続けなさいました御努力の程敬服致します。どうか此上とも健康に御留意の上「京絃」の歴史をのばして下さいませ。

榎本 旭風
高千穂 旭楓

此の度創刊二十周年をお迎えなさいました御日出度うございます。心より御祝い申し上げます。私達は一つ手紙をと思いましたが大変でございますのに、二十年の永い間続けられました事は仲々の御事と存じます。今後共京絃の益々御繁栄をお祈りいたします。

平井 春嶺

これからは、各演奏会の、出演者の批評を掲載してほしい。(せめて関西だけでも) これからは、京絃社主催の、有料演奏会を開いてほしい。(せめて年一回でも) これからは、京絃社主催の、コンクールを開いてほしい。(関西だけのもの)

これからは、京絃社は、琵琶人の指導的立場に立ってほしい。(特に若い琵琶人に)

これからは、琵琶に関する、質疑応答欄、をもうけてほしい。

以上の実現は仲々困難であることはよくわかっておりますが、せめて一つだけでもやってほしいと思います。敢えて希望して創刊二十周年の祝辞といたします。

押田 旭 窃

この度は貴紙創刊二十周年を迎えられ誠に御目出度御喜び申し上げます。他の邦楽とちがい二十年の長い年月機関紙を続けてお出しなされた事は、どんなにか御苦労のあった事と存じます。今後も琵琶界の報道紙として御飛躍をお願い申し上げますと共に、京絃の益々御発展を心からお祈り申し上げます。

浅野 晴風

貴社二十周年を迎えられお目出とう存じ上げます。難かしく近頃の斯会にあって二十年間一回も休まず続けられた御努力に對し心から敬意を表する次第であります。今後益々御発展をお祈りいたします。

竹下 翠風

編集という表面に現れない苦労の多い仕事を、よくぞ二十年間続けられたものと先づ敬意を捧げます。同じ編集の道を四十年続けて来た私として、誰よりも理解できる積りで出来上がった紙上の華やかさの陰の努力——これは芝居に於ける舞台と裏方、あるいは奈

古谷 寛水

二十周年に憶う

今回京絃紙が創刊二十周年を迎えた。各方面の諸氏からの祝詞讀辭は多分本誌を埋める事であろう。本誌編集者側近の一人と目される私が、今更で管々しく祝辭を述べた事は何だか空々しくさえ思われるので、植村氏よりぞ今更で頑張った、と言だけ察めて、他は側面から既往を觀察したいと思う。

本誌の美点は何と云っても、文化的記事がその大半を占めている事である。無論琵琶界のニュース記事は必要であるが、之を短縮或は取捨して巻尾の一、二頁に止め、余の全頁を琵琶道史、関係ある歴史の研究、芸術上の理論、斯界昔話、等々の教養的記事に充たしているのは実に立派である。之等の記事により啓発される読者も多い事と思われる。

併し反面、之等の記事に關心を示さず、否理解し得ない読者も在る事は事実である。現に甚だしきに至っては、古参者であり乍ら、京絃は金儲け目的のブンヤ仕事だ、自分は一頁も読まずに層籠に棄てている、と人前でも外する者もいる。その小人的態度は実に歎かむらしい次第である。私は齒に衣を着せる事が嫌いなので有りの

祝 京絃創刊二十周年

小川 吟水

早いもので、二十年の永い間奉仕的なお仕事を続けなさいました御努力の程敬服致します。どうか此上とも健康に御留意の上「京絃」の歴史をのばして下さいませ。

榎本 旭風
高千穂 旭楓

此の度創刊二十周年をお迎えなさいました御日出度うございます。心より御祝い申し上げます。私達は一つ手紙をと思いましたが大変でございますのに、二十年の永い間続けられました事は仲々の御事と存じます。今後共京絃の益々御繁栄をお祈りいたします。

平井 春嶺

これからは、各演奏会の、出演者の批評を掲載してほしい。(せめて関西だけでも) これからは、京絃社主催の、有料演奏会を開いてほしい。(せめて年一回でも) これからは、京絃社主催の、コンクールを開いてほしい。(関西だけのもの)

これからは、京絃社は、琵琶人の指導的立場に立ってほしい。(特に若い琵琶人に)

これからは、琵琶に関する、質疑応答欄、をもうけてほしい。

以上の実現は仲々困難であることはよくわかっておりますが、せめて一つだけでもやってほしいと思います。敢えて希望して創刊二十周年の祝辞といたします。

押田 旭 窃

この度は貴紙創刊二十周年を迎えられ誠に御目出度御喜び申し上げます。他の邦楽とちがい二十年の長い年月機関紙を続けてお出しなされた事は、どんなにか御苦労のあった事と存じます。今後も琵琶界の報道紙として御飛躍をお願い申し上げますと共に、京絃の益々御発展を心からお祈り申し上げます。

浅野 晴風

貴社二十周年を迎えられお目出とう存じ上げます。難かしく近頃の斯会にあって二十年間一回も休まず続けられた御努力に對し心から敬意を表する次第であります。今後益々御発展をお祈りいたします。

竹下 翠風

編集という表面に現れない苦労の多い仕事を、よくぞ二十年間続けられたものと先づ敬意を捧げます。同じ編集の道を四十年続けて来た私として、誰よりも理解できる積りで出来上がった紙上の華やかさの陰の努力——これは芝居に於ける舞台と裏方、あるいは奈

古谷 寛水

二十周年に憶う

今回京絃紙が創刊二十周年を迎えた。各方面の諸氏からの祝詞讀辭は多分本誌を埋める事であろう。本誌編集者側近の一人と目される私が、今更で管々しく祝辭を述べた事は何だか空々しくさえ思われるので、植村氏よりぞ今更で頑張った、と言だけ察めて、他は側面から既往を觀察したいと思う。

本誌の美点は何と云っても、文化的記事がその大半を占めている事である。無論琵琶界のニュース記事は必要であるが、之を短縮或は取捨して巻尾の一、二頁に止め、余の全頁を琵琶道史、関係ある歴史の研究、芸術上の理論、斯界昔話、等々の教養的記事に充たしているのは実に立派である。之等の記事により啓発される読者も多い事と思われる。

併し反面、之等の記事に關心を示さず、否理解し得ない読者も在る事は事実である。現に甚だしきに至っては、古参者であり乍ら、京絃は金儲け目的のブンヤ仕事だ、自分は一頁も読まずに層籠に棄てている、と人前でも外する者もいる。その小人的態度は実に歎かむらしい次第である。私は齒に衣を着せる事が嫌いなので有りの

塩谷 旭洲

儘を記したが、茲で読者諸賢にお願いする。植村氏は誠心誠意斯界を裨益せんが為、利害を度外視して毎月々々多大の労力と時間を費して編集しているのだ。琵琶芸術に理解を持ち、斯道の発展を希望せらるる諸賢は、何卒植村氏の意の存する所に御同情を寄せられ、末永く御後援下さらん事を、友人としての私より切に懇願申し上げる次第である。

熊木 秀司

京絃の発行、こんなむづかしい事業を、こんなに長くお続けになる。内容の秀でた原稿が良く集まる。いつもこのような事に感服し乍ら読んでおります。御苦労に感謝します。

針谷 錦古

このたび創刊二十周年を迎えられ心から御祝詞申上げます。長期に亘り幾多辛酸を積み重ね輝かしい栄誉と業跡を残され偏に御研鑽の賜と感激いたして居ります。

辻 旭城

ほゞえまじき、師弟絃友達の交流をもつ京絃は、TVが始めて放送された昭和二十八年の翌年から、近代科学日本までの長い道程の中に、語り伝えられる色々な琵琶に興味の多い歴史や歴史を数多く紹介されてきた。古代

馬場 鴨水

文化の遺跡、楠公父子を背景とする河内平野の伝承遺跡や、国盗り物語で有名を源平最後の決戦場、壇の浦など枚挙に遑がない。こうしたもの、中から色々の祭ごとをし、行事が現在まで静かに伝え残されて来ているが、国内にあって男女の性別さえ疑わしい歌手が歌う卑猥な歌の流行する中で、是等の地方では琵琶歌によって永く語り続けて欲しいという希望を持っている。特に武家政治への転機の舞台ともなった壇の浦は、また近代日本の黎明をつけた場所でもあり、此の地と高杉晋作とは深い繋りを持っているだけに、琵琶に期待するのは当然の事である。更に往時全世界の注目を集めた日清役の講和談判が下関で行われた席上、筑前琵琶で義士の本懐が演奏されたと聞く。

荒井 藍水

二十周年お目出とうございます。長年のご苦労を推察申し上げ一層の御奮励をお願い致します。貴誌にはまことに啓発されるものあり、毎月楽しみにして居ります。

京絃二十周年、お目出度うございます。

いま琵琶人の多くは京絃とともに歩み、琵琶の研究を唯一の娯しみとし、新しい智識とムードにひたっておられることでしよう。また美しいプリント、ユニークな内容は読者の心を如何に和らげてくれることでしよう。向後も変らぬご努力とご健康を念願します。

京都芸術祭名流会に 三月二十八日京都

邦舞参加の首記が開催され琵琶は天津八千代女史が中村万作氏の立方で「耳を芳一」を披露し好評であった。

祝 京絃創刊二十周年

小川 吟水

早いもので、二十年の永い間奉仕的なお仕事を続けなさいました御努力の程敬服致します。どうか此上とも健康に御留意の上「京絃」の歴史をのびして下さいませ。

樹本 旭風
高千穂 旭楓

此の度創刊二十周年をお迎えなさいました御目出度うございます。心より御祝い申し上げます。私達は一つ手紙をと思いましたが大変でございますのに、二十年の永い間続けられました事は仲々の御事と存じます。今後共京絃の益々御繁栄をお祈りいたします。

平井 春嶺

これからは、各演奏会の、出演者の批評を掲載してほしい。(せめて関西だけでも) これからは、京絃主催の、有料演奏会を開いてほしい。(せめて年一回でも) これからは、京絃主催の、コンクールを開いてほしい。(関西だけのもの) これからは、京絃は、琵琶人の指導的立場に立ってほしい。(特に若い琵琶人に)

これからは、琵琶に関する、質疑応答欄、をもうけてほしい。以上の実現は少々困難であることはよくわかっておりますが、せめて一つだけでもやってほしいと思います。敢えて希望して創刊二十周年の祝辞といたします。

古谷 竟水

二十周年に憶う

この度は貴紙創刊二十周年を迎えられ誠に御目出度御喜び申し上げます。他の邦楽とちがい二十年の長い年月機関紙を続けてお出しなされた事は、どんなにか御苦労のあった事と存じます。今後も琵琶界の報道紙として御発展をお願ひ申上げると共に、京絃の益々御

浅野 晴風

貴社二十周年を迎えられお目出とう存じ上げます。難かしく近頃の斯会にあって二十年間一回も休まず続けられた御努力に對し心から敬意を表する次第であります。今後益々御発展をお祈りいたします。

竹下 翠風

編集という表面に現れない苦勞の多い仕事を、よくぞ二十年間続けられたものと先づ敬意を捧げます。同じ編集の道を四十年続けて来た私として、誰よりも理解できる積りで出来上がった紙上の華やかさの陰の努力——これは芝居に於ける舞台と裏方、あるいは奈

落と同じ意味の表裏のものです。人は或いは物好きというかも知れませんが、けれど誰かがしなければならぬものです。文明や文化の進展のために——。

今回京絃紙が創刊二十周年を迎えた。各方面の諸氏からの祝詞讃辞は多分本誌を埋める事であろう。本誌編集者側近の一人と目される私が、今更で管々祝辞を述べた事は何だか空々しくさえ思われるので、植村氏より今更で頭張った、一言だけ褒めて、他は側面から既往を觀察したいと思う。

本誌の美点は何と云っても、文化的記事がその大半を占めている事である。無論琵琶界のニュース記事は必要であるが、之を短縮或は取捨して巻尾の一、二頁に止め、余の全頁を琵琶道史、関係ある歴史の研究、芸術上の理論、斯界昔話、等々の教養的記事に充たしているのは実に立派である。之等の記事により啓発される読者も多い事と思われる。

併し反面、之等の記事に關心を示さず、否理解し得ない読者も在る事は事実である。現に甚だしきに至っては、古参者であり乍ら、京絃は金儲け目的のブツヤ仕事だ、自分は一頁も読まずに屑籠に棄てている、と人前で口外する者もいる。その小人的態度は実に歎かむらしい次第である。

私は速に衣を着せる事が嫌いなので有りの

儘を記したが、茲で読者諸賢にお願いする。植村氏は誠心誠意斯界を裨益せんが為、利害を度外視して毎月々々多大の勞力と時間を費して編集しているのだ。琵琶芸術に理解を持ち、斯道の発展を希望せらるる諸賢は、何卒植村氏の意の存する所に御同情を寄せられ、末永く御後援下さらん事を、友人としての私より切に懇願申し上げる次第である。

塩谷 旭洲

京絃の発行、こんなむづかしい事業を、こんなに長くお続けになる。内容の秀でた原稿が良く集まる。いつもこのような事に感服し乍ら読んでおります。御苦勞に感謝します。

熊木 秀司

祝・京絃創刊二十周年。

針谷 錦古

このたび創刊二十周年を迎えられ心から御祝詞申し上げます。長期に亘り幾多辛酸を積まれ輝かしい栄誉と業跡を残され偏へに御研鑽の賜と感激いたして居ります。

辻 旭城

ほへえましき、師弟絃友達の交流をもつ京絃は、TVが始めて放送された昭和二十八年の翌年から、近代科学日本までの長い道程の中に、語り伝えられる色々な琵琶に興味の多い歴史や歴史を数多く紹介されてきた。古代

文化の遺跡、楠公父子を背景とする河内平野の伝承遺跡や、国盗り物語で有名な源平最後の決戦場、壇の浦など枚挙に遑がない。

こうしたものの中から色々の祭ごとをし、行事が現在まで静かに伝え残されて来ているが、国内にあって男女の性別さえ疑わしい歌手が歌う卑猥な歌の流行する中で、是等の地方では琵琶歌によって永く語り続けて欲しいという希望を持っている。特に武家政治への転機の舞台ともなった壇の浦は、また近代日本の黎明をつけた場所でもあり、此の地と高杉晋作とは深い繋りを持っているだけに、琵琶に期待するのは当然の事である。更に往時全世界の注目を集めた日清役の講和談判が下関で行われた席上、筑前琵琶で義士の本懐が演奏されたと聞く。

二十周年お目出とうございます。長年の苦勞を推察申し上げ一層の御奮勵をお願い致します。貴誌にはまことに啓発されるものあり、毎月楽しみにして居ります。

荒井 藍水

馬場 鴨水

こうした多彩な歴史の中に、今も尚古典芸術の最高峰にある琵琶界に、判り易くて読みよい風格を持ち、琵琶人に親しまれていく機関誌京絃は、刊を追うに従って内容が充実する。創刊二十周年を迎えられた京絃社々長植村真水師に心からお祝申上げると共に、本誌が琵琶界の発展に寄与し今後の御活躍を祈ってお祝詞とする。

いま琵琶人の多くは京絃とともに歩み、琵琶の研究を唯一の楽しみとし、新しい智識とムードにひたつておられることでしょう。また美しいプリント、ユニークな内容は読者の心を如何に和らげてくれることでしょう。向後も変らぬご努力とご健康を念願します。

仲川 秀邦

創刊二十周年、お目出とうございます。随分早いもので京絃誌の生れました頃は紙も不足で色々御苦勞でございました。御努力の賜の、立派に成人され嘸御満足の事ござ

京都芸術祭名流会に

三月二十八日京都

琵琶 出 演 南座に於て各種邦楽邦舞参加の首記が開催され琵琶は天津八千代女史が中村万作氏の立方で「耳なし芳一」を披露し好評であった。

中山鳳水会 三月三十一日昼会主宅で開
琵琶研修会 催、中山、養老、宮之原、北
野、川村、水谷、辻、石橋各氏出席、琵琶発
展策として①安価で軽量の琵琶の研究、②
弾法の簡易化、新曲の作詞及文章の簡易化、
③演奏を十五分程度に限定し尺八、琴、三絃
等との合奏、以上につき協議した。

ラヂオで 三月二十八日夕五時NHKラ
琵琶放送 デオFMで押川旭葉「五条橋」、
都錦穂「本能寺」、五月九日同「大高源吾」、
木原綾子、「木村重成」小山田貫水各氏が放
送された。

愛姫琵琶連盟 四月十四日午後一時〜五
春季演奏大会 時半松山市市民会館、主催同
連盟、君が代、旭佳、旭悠鳥、旭悠、旭好、
舞旭悠綾、南部坂一升沢旭悠綾、烈女松江、
原田旭悠鳥、琵琶吟吉野山、松本旭翠、禪師と
正宗、和田旭秀、那須与市、井出旭明、常陸
丸、湯藤旭窓、白虎隊、遠藤旭佳、禪師と正
宗、西森旭生、石童丸、佐々木耶水、伊豆の
御難、村上旭隆、曲垣平九郎、京関旭彰、戦
艦大和、白石旭優、若き敦盛、谷口旭英、羅
生門、栗田綾水、坂本龍馬、石塚旭奏、城山
一、佐藤晃紘、白虎隊、浅田芦水、尺八、劍士
二、曾我兄弟、外久旭好、平野国臣、佐竹旭
都、羅生門、森脇旭悠

山田幻水先生迎春八十才 四月十四日十
春季演奏大会 時二十時横須
賀市田浦公民館、主催横須賀琵琶連盟。金剛
石、合奏、本能寺、春風、恩讐の彼方、春
浦、霧の川中島、木内順水、白虎隊、柴田叙
水、風林火山、山本珠水、桜狩、石井志水、
伊豆の御難、酒井緑水、名和館、齊藤旭邑、
石童丸、小保内真水、乃木将軍、森捧水、大
徳寺、菅沼旭光、花吹雪、末吉希水、城山、
安西恵水、新撰組、小関香水、采崎統水、西
郷隆盛、鈴木江水、一乗寺決闘、土橋虎水、
舟弁慶、齊藤殊水、小柳旭糸、吉野懐古、鈴
木辰水、うづは猿、石井桑水、元寇、伊集院
牙城、吉野落、山田幻水、(以下来賓)須磨
の敦盛、水藤五郎、吹雪の敵、平野鉦水、小
栗栖、榎本山水、竜の口、鈴木謙水、川中島
一、梅沢响水、巖流島、秋山錦賜、戦艦大和、
中谷襄水、羅生門、山口速水、茨木、山崎旭萃。
尚当日席上、日本芸能顕彰会は、山田幻水
氏にトロフィーとリボン付金メダルを、齊藤殊
水女史に桶とリボン付金メダルを贈呈し、又
小関香水さんからお二人に花束を贈られた。

大阪琵琶同好会の 昔豊太閤が豪華を誇
醍醐三寶院桜祭 った醍醐の花見行列を
記念して毎年四月醍醐寺三寶院で各種の行事
があり今年四月十四日昼醍醐会館で大阪琵
琶同好会が主催して開催二百の聴衆を魅了し
た。川中島、中山嶽水、関ヶ原、作花旭友、
井伊大老、養老駿水、西郷隆盛、水谷旭甫、

屋島の誉、宮之原聖水、安宅の関、辻旭城、
姫ゆりの塔、石橋旭嶺、城山、中山鳳水、羅
生門、寺尾旭吉栄、吉野懐古、田中歎水、神
崎与五郎、堪忍袋、光旭仙。外に詩吟舞踊等。
第二回赤心流 四月二十一日十時静岡市
春の大会 婦人会館、詩吟剣舞柔道吟
など約百題が多数の会員や来賓などにより披
露された。(春の会は詩吟、秋の会は琵琶)

皆伝披露 四月二十一日一時〜五時敦賀
演奏大会 市文化会館、主催一水会福井支
部。洲水会。会津白虎隊、吉野、武士の意地
一内田、城山、山本、石童丸、星山、淡水、白
虎隊、山脇圭水、羅生門、村田知水、巖流島
一内田、内田、水、桜井の駅、田中鶴水、扇の的、
皆伝披露岸本港水、舞踊付、姫百合の塔、西
川磯水、新撰組、阿部勝水、西郷隆盛、水谷
充水、敦盛、田中歴水、茨木、矢吹旭美津、
坂崎出羽守、田中篁水、天野屋利兵衛、会主
吉野洲水。

琵琶浅野晴風氏 四月二十二日昼宇都宮
県民大会に演奏 市の体育館に於ける県民
大会に「屋島の誉」を演奏し二千の聴衆から
万雷の拍手を受けた。
故水藤錦穂 四月二十五日東京日本橋三
追悼演奏会 越劇場、錦びわ本部主催。春
秋譜、桜佳、木原、松井、沢、桜水、桜華。

箏入、菅公、津谷桜佳、曲垣平九郎、木原綾
子、扇の的、小堀桜紅、耳なし芳一、箕村桜
洲、義士討入、村木桜柳、(以下来賓)幻想
海陽江、仲川秀邦、北の庄、藤巻旭鴻、夢、
浅野晴風、若き敦盛、宮武旭豊、原島旭粧、
押田旭窃、桜狩、輝錦司、レコード屋島懐古
一、故錦穂、舞三、茨木、山本旭錦、姉妹逢坂
山、鈴木流泉、湖水渡、田中旭嶺、挨拶、辻
靖剛、録音時雨曾我、故錦穂、うつほ猿、水
藤五郎、小絃藤巻旭陽、五位鶴、桜水、桜華、
錦穂、小絃吾妻江風、詩吟藤波白林、箏入、
戦艦大和、三浦蓮水、井伊大老、都錦穂、新
撰組、若水桜松、良寛詩境、桜水、桜華、綾
子、桜佳、詩吟三、箏、尺八、立方五。

日本琵琶振興会 四月二十八日一時〜八
四月親睦研究会 時、東京新宿洲鳳会館(会
長鈴木流泉氏)。顧問吉水錦翁師を偲びそ
の追悼慰霊のため数氏が霊前に献奏、故人の
録音「戦艦大和」「小松の操」を公開した。

東都旭会葬会記念 四月二十九日昼東京
第一回演奏会 豊島区民文化ホール、
主催同会。良寛さん、旭恵、旭石、一茶、旭
裕、旭晶、若き敦盛、旭鵬、旭彰、旭茜、笛
入、北の庄、旭星、旭陽、伏見の吹雪、旭容、
五条橋、旭神、壇の浦、旭茜、安宅の関、旭
映、旭鵬、旭神、旭章、衣川、旭好、旭鴻、
秋風故郷山、旭冷、旭史、笛入、娘みゆき、
旭石、旭陽、旭晶、華道華の恵み、旭冷、旭

陽、旭彰、旭鵬、旭神、華道付、王昭君、旭
晶、旭章、茶道松風の曲、旭茜、旭紅、旭映、
旭石、茶道付、吉野山懐古、旭章、旭鴻、旭
蓮、立方、小栗栖、旭史、羅生門、旭映、堅
田落、旭翠、旭英、旭紅、巡礼お鶴、旭薫、
唐人お吉、旭彰、天の羽衣、旭蓮、旭史、旭
星、旭粧、旭薫、笛入、新琵琶楽、全員、立
方三、琴、笛、唄、二、伽羅の兜、旭陽、大楠
公、旭紅、石田三成、旭粧、怨の能面、会長
藤巻旭鴻。尚「伏見の吹雪より「衣川」まで
はスライド併映。

三位研修同志会 四月二十九日昼三鷹市
四月例会 上連雀地区公会堂。伴風
語切連弾、錦幽、錦道、九連城、富田晴萌、
台湾人、田戸桜丸、夢、山崎錦幽、橋大隊長
一、伊藤馨水、桜狩、篠宮櫻水、山科の別れ、
中村修水、太田道灌、伊集院鼓城、元寇、清
水源城、乃木将軍、坂本錦道、海陽江、西村
嵩峻、以上演奏のあと故水藤錦翁遺稿単行本
大日本詩歌吟詠会発行「朗吟朗詠練磨集」を
出席者に配布し故人を偲んで散会した。

京都琵琶協会 五月三日一時平井春嶺
五月定例茶話会 氏宅に於て開催。去月十
四日の春季演奏会でビデオ大阪から出張撮影
された演奏者の映像と音の同時記録映像機に
より出演者全部の演奏を再欣賞のあと夕食を
共にしながら①秋季演奏大会を十一月十日か
十七日市立文化芸術会館で開催、②六月に予

定の北海道旅行は八月に延期、③臨時茶話会
を五月十一日昼会員梅原旭濤女史宅で開催等
を協議して九時半散会。出席者戸倉、田中、
梅原、矢吹、安住、牧、木村、平井、植村。
一水会埼玉 五月四日夕五時半東京上野
支部演奏会 本牧亭。城山、花俣圭水、西
郷隆盛、平井洲誠、雪の進軍、河合桃水、天
野屋利兵衛、川本玉水、菅公、角田置水、木
村重成、松崎葉水、神崎東下り、会主松本孝
水、井伊大老、藤川晴水、俊寛、北沢来水、
石童丸、白土棕水、舟弁慶、平野鉦水、高橋
狸水、内田琴水、鈴木琢水、楠正成、小山田
賞水。

薩摩琵琶四明会 五月五日昼京都
二十五周年記念演奏会 東山安井金比羅会
館。会員の外地元友交諸団体を始め東京、鹿
児島等のゲスト数氏賛助出演、また東京日本
芸能顕彰会から美事な紋章入金金盃が贈られ
てその贈呈式が理事長鈴木鉦次郎氏(代理植
村篁水)によって厳粛裡に行われたあと此大
金盃が演台横に飾られて超満員の会場に光彩
を放った。形見の桜、山本嶺舟、桜、才田錦
嶺、平井幸生、平井紅嶺、花紅葉、三上見城、
武蔵野、染谷晃岳、大金盃贈呈式、門琵琶合
奏、栗本、小野、栗原、矢吹、平井、台湾人
一、伊勢谷安江、桶狭間、山本岳盛、広瀬中佐
一、有馬南城、裾野の曙、岡部錦蝶、吉野山懐
古、京都一水会木下皇水、彰義隊、杉岳秀、